

春が過ぎ、梅雨が明けた。

ナーヤさんは、頻繁にやって来るようになった。

そしてハナも、いつの間にか、この家に棲みついて、すっかりこの家の飼い犬気取りだった。

食餌のときも、クロフカと一緒にになって餌をもらった。

マーサおばさんも呆れ顔で

「ほら、鼻の赤い仔……お前はハナちゃんだね……はい、ごはん。

お前もおあがり」

と、クロフカと並んでご飯を貰うまでになった。

クロフカもハナがいとおしくて、いつも二匹は一緒にいた。

「かあさん、この犬、何処の仔かしらね。とうとう棲みついちゃったわね」

「しかたないわね……クロフカのガールフレンドだから……」

「もしうちにずっと居るんだったら、鑑札貰いにいかなくちゃね……」

……

「そうね……」

ハナが周りで遊びまわっている時も、クロフカは毎日、門の処で、テオおじさんが戻ってくるのを待ち続けた。

そして秋。

何処までも突き抜けるような秋晴れの日、クロフカはいつものように庭で花と遊んでいた。

「ねえ、この庭って、モグラいるかしら……」

「んんと……いるんじゃないかな……」

「ねえ、あのさ……あたし、前から思ってたんだけど、クロフカって……」

と、その時、クロフカの耳が、ぱっとそば立ち、はじかれたように突然立ち上がった。

「どうしたの？……」

「ちょ、ちょっと待って……」

耳をピンと立てて、聞こえるもの感じられるもの全てを逃すまいと、感覚を研ぎ澄ませ、中空を凝視した。

「え？ なあに？ 何なの？」

「ちよっと黙って……ほら……聴こえる……」

「え？」

クロフカが走り出した。

門にむかって走り出した。

そして 急に騒がしく吠えはじめた。

「おじさんだ！ おじさんだ！」

「帰ってきた！ おじさんが帰ってきた！……おばさん！おばさん！帰ってきましたよ！ テオおじさんです！ おじさんが帰ってきました！……」

クロフカのはずんだ声を聞いてマーサおばさんが家の中から出てきた。ナーヤさんも、絵の具だらけの前掛けをかけたまま、テラスの掃き出し窓から庭に降りてきた。

工房からは、職人さんが出てきた。

みんな前庭に集まって道の先を眺めた。

やがて、はるか道の向こうから一台の車が姿を現した。

テオおじさんの乗った車がだんだん近づいて来た。

車はゆっくりと門をくぐり、前庭に停まった。

車から降り立ったテオおじさんは弱々しかった。

「やあ、クロフカ……」

テオおじさんは、出迎えた人々の間から顔を突き出しているクロフカの鼻先をそっと撫で、そして家の中へと入っていった。

クロフカは嬉しかった。

どんなに弱々しくても、テオおじさんが帰ってきたのが嬉しかった。

嬉々として、庭中を駆け回った。

それから、庭の桃の根方に行くと、そこにぺたりと座り込んだ。

日差しが降りそそぐ花壇の一角、モモのお墓がそこにあった。

「モモ……おじさん無事に帰ってきたよ……君のおかげだね、きつと……」

穏やかな時が流れ、クリスマスが過ぎ、新しい年が明けた。

テオおじさんは、徐々に体力を回復してきたようだった。

少しずつ、庭を歩くようになり、草花の手入れをし始め、散歩に出る

ようになった。

クロフカは、マーサおばさんの時と同じように、テオおじさんの散歩のお供もした。

クロフカは散歩が大好きだった。

散歩となると、ついつい嬉しくて、どんどん先に行こうとする。それが、マーサおばさんとの散歩であれ、テオおじさんとの散歩であれ、張り切ってしまうのだった。

「おじさん、こっちですよ……早く早く……こっちがいつもの散歩コースなんですよ……マーサおばさんとは、いつもこの道を行くんです」

「この先に運河があるんですよ。マーサおばさんは運河の並木道が大好きなんです。僕もあの並木道が大好きです。おじさんにも教えてくださいね。とっても素敵なお供さんなんですよ……」

「ほら、あそこです。早く早く……」

月日が流れた。

また秋がきて並木道が黄金色に染まり、少しずつ冬になった。

その日も、クロフカはテオおじさんの散歩のお供をした。

小春日和の楽しい散歩道だった。

「おじさん、こっちこっち……いつもの運河の並木道に行きましよう」

「クロフカ……お前は力が強いなあ……もう少し、ゆっくり歩いて

くれよ……」

陽に当たって金色に染まったアカシアの葉が、はらはらと舞い散って
辺りは一面黄金色になった。

その金色が、初冬の青空に映えて輝いた。

そして、その帰り道、テオおじさんは道の途中で不意に立ち止まった。
クロフカは急に止まった気配をリードで感じ、振り返るとテオおじさ
んを見上げた。

戸惑いながらも、同じように立ち止まり、また歩き出そうとした。

「おじさん、どうかしたんですか？」

「クロフカ……私は少しここにいるよ……ちよつと休みたい……」

テオおじさんは、その場に膝をついて、ゆっくりかがむとクロフカの
リードを外した。

自由になったクロフカは、少しはしゃいで小走りに走り出した。

「よし、追いかけてこですよ、おじさん……それっ」

しかし、振り返ると、テオおじさんはその場に片膝をつけてしゃがみ
こんだまま動かない。

「あれ……」

テオおじさんの様子を見て、クロフカはトボトボと戻ってきた。

「おじさん、おうちはまだ先ですよ……」

テオおじさんが口を開いた。

「クロフカ、お前、ひとりで先にお帰り……」

「おじさん……どうかしたんですか？」

「クロフカ……私は、腰が痛いんだ……もう少し此処にいるよ……」

「おじさん……」

クロフカは、少し心配になって、テオおじさんの周りをぐるぐると廻った。

やがて、息を荒げているテオおじさんの傍らにぴったりと寄り添うと、その場に座り込んで、彼の顔を舐めはじめた。

そして、まっすぐに向き直って坐り、首をかしげてテオおじさんのことを覗き込み、

「おじさんてば！……」

と、一声元気よく呼びかけた。

「クロフカ、お前は元気がいいなあ」

見上げる愛犬に向かって、テオおじさんは話しかけた。

「クロフカ……お前は賢いんだから、うちへ行ってマーサおばさん
を呼んできてくれないか……」

クロフカは、鼻を鳴らして見上げるばかりである。

「おじさん……おうちへ帰りましょう……」

「ああ、お前は人間の言葉が話せない……分かるかなあ……クロフ
カ……」

「おじさん……わかりますよ、僕わかりますよ……でも、此処を離
れちゃいけない気がするんです。僕は人の言葉が話せない……僕の言
葉は、おじさんには解らない……」

「もっとワンワン吠えて、誰かよんでくれないかな……」

辺りは、だんだんと薄暮れかかって、一番星が輝き始めた。

クロフカは再びテオおじさんの顔を覗き込んだ。

大柄なテオおじさんが、なぜかとても細くなって顔色が白っぽくなっ
たように思えて、いっぺんに年をとっておじいさんになったように見え
た。

その時、クロフカはテオおじさんの周りに光がいくつも飛ぶのを見た。

そして、一瞬ではあったが、おじさんがなんだか透き通って見えた。

クロフカは、はっとしてテオおじさんの光に向かってワンワン吠えた
てた。

「おじさん！ おじさん！……誰か！誰かきてください！……」

全身の毛が総毛立つような、
言いよりの無い不安がひろがって吠え続
けた。

つづく

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します